

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

日本における地域文化研究への新たなアプローチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009030

文
日高真吾

日本における 地域文化研究への 新たなアプローチ

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応した多様な生活様式をもとにした地域文化を育んできた。しかし、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかでみえにくくなった印象を私たちに感じさせる。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域では、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない、あるいは消滅させてしまう状況になることもしばしばである。一方で、豊かな社会生活の基盤として、あるいは災害からの復興において、近年、地域文化の果たす役割の大きさが、指摘されるようになってきた。なかでも災害からの復興過程においては、地域文化への注目度が高まっている。



企画展「記憶をつなぐー津波災害と文化遺産」(2012年10月19日、筆者撮影)。

2004年の中部地震で壊滅的な被害を受けた山古志村（現在、新潟県長岡市）は、全村民が避難する事態となった。当時の報道などを振り返ると、多くの住民がもう村に戻れないだろうと思った、ということが紹介されており、山古志村という地域が消滅する危機に見舞われていたことを知ることができる。このときの山古志村の復興活動で、住民に大きな力を与えたのが、山古志村の文化の象徴でもあった「牛の角突き」の再開であり、その地域文化に大きな注目があつまったという事例がある。

また、未曾有の津波被害を三陸沿岸部にもたらした東日本大震災では、全国から多くの人々が被災地を訪れ、復興に向けたさまざまな支援活動がおこなわれた。ここでは、震災前にはあたり前のようにあった生業の道具類、季節ごとにおこなわれていた祭りや芸能、あるいはコミュニティ内で築かれてきた人間関係が注目され、これらの地域文化を核とした活動がさまざまな形でおこなわれた。

このような災害からの復興における地域文化が果たす役割の大きさを念頭に、国立民族学博物館（以下、民博）は、東北地方の地域文化に着目した支援活動をおこなった。民博では、東日本大震災発災後、館内に大規模災害復興委員会を設置し、文化人類学を中心とする人文科学の研究所、あるいは博物館という立場から被災地支援をおこなったのである。これらの活動は、2012年に開催した企画展「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産」という形で実現した。また、2012年度から2016年度までの5年間、岩手県、宮城県、福島県の無形文化財の担い手である芸能団体を招へいして毎年開催した「みんなく研究公演」、そして2014年には南三陸町波伝谷の被災前と被災後の様子を撮影したドキュメンタリー映画『波伝谷に生きる人びと』（我妻和樹監督作品）の上映をおこなった。これらの公演や映画会では、実際に被災地から招へいした方々との対談をおこない、復興において地域文化が心のよりどころとなることを明らかにしてきた^{注1)}。しかし、復興の原動力となる可能性を秘めた地域文化は、それらを内包するものの1つである地域博物館の活動やその活用が低調であることに代表されるように、地域においては平常時、ほとんど意識されていないこともあらためて見えてきた。

そこで筆者は、日本列島における地域文化についてあらためて着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかという実際の状況について強い関心をもった。さらに、このような地域文化の動向に、民博が所属する人間文化研究機構が目指している「人間文化研究」がいかに貢献しうるのかについて、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献の在り方を模索したいと考えた。そこで、人間文化研究機構の基幹研究の1つとして「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」という研究プロジェクトを立ち上げることにした。

本研究では、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって有意義な形で表象するためのシステムを構築することを目的としている。研究は、地域文化の「再発見」と「保存」、「活用」という3つの視点をもとに展開していくこととしている。なお、本研究プロジェクトは、2012年度から2014年度に実施した人間文化研究機構連携研究「災害と人間文化研究」のなかで筆者が代表を務めた「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究—大学共同利用機関の視点から」^{注2)}において見出された実践研究の必要性、大学共同利用機関の博物館機能をじゅうぶんに生かした研究活動の推進という問題意識にも基づいている。

以上の経緯をもって2016年度から本格的に開始した「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の現在の研究活動を紹介するとともに、その展望を考えたい。

研究対象となる「地域文化」

最初に、研究対象とする「地域文化」の「地域」について簡単に整理しておきたい。筆者は本研究で扱う地域には、大きく2つあると考えている。1つは、『平凡社百科事典』で定義されている「地域areaとは地形、気候、あるいは文化、政治などのうちのどれか1つの要素について同質の性格をもつ地表の広がりやをさし、2つ以上の地域の中の相違を地域差という。」という観点に立った地域であり、本研究では、地域をかたどる要素のうち「文化」のまとまりとしての地域に着目す

る。もう1つは、本研究を進めるうえで連携する地域博物館や地域の学校との関係から、行政で区分される市町村という地域である。つまり、研究対象となる地域には、生活環境のなかで育まれた文化を共有する地域と、行政の枠組みでつくられた市町村としての地域が存在するということになるが、本研究では、これら2つの地域の枠組みを明確に区別することはしない。それは、文化的な範囲の地域であれ、行政の範囲としての地域であれ、いずれも、地域文化を担っていることには変わりがないと考えているからである。

次に本研究では「地域文化」を、何世代にもわたって継承されてきた、ある地域に特有の生活様式と幅広くとらえている。ここでは、文化を伝える媒体として、その地域に伝えられている民俗資料にとくに注目する。民俗資料とは、文化財保護法第2条第1項第3号で、「民俗資料：衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗、慣習及びこれに使われる衣服、器具、家屋等であって国民生活の推移を理解するのに不可欠のもの」とあるように、日本人の生活の推移を理解する有形、無形の資料群を指しており、本研究ではこれらの資料群を「民俗文化財」とする。ここで、文化財という表現を用いると、国や県、あるいは市町村の「指定文化財」がイメージされやすいが、本研究では指定文化財のみを扱うことはしない。たしかに指定された民俗文化財は、その地域の文化を示す代表的な資料として位置づけられる。しかし、それらは、たくさんある未指定の民俗資料から選ばれたものである。ゆえに本研究では、未指定の民俗資料も「民俗文化財」として広義にとらえ、研究の対象とする。

以上の観点から、本研究は、日本各地の地域で育まれた地域文化を「再発見」し、「保存」、「活用」するための方法論の開発をおもに民俗文化財に焦点をあてて進めていく。

地域文化を再発見するための研究活動

「地域文化の再発見」の活動では、地域文化研究、とりわけ民俗学を軸とした研究によって再発見される地域文化に着目したいと考えている。本研究では特に、大学教育を通じた民俗資料の調査研究で再発見される地域文化に注目する。

近年、大学による民俗学教育では、実際に学生が教員の指導のもと、地域でフィールドワークをおこない、研究対象となる地域の古老や有識者の話をうかがいながら、コミュニケーション術を鍛え、その地域の文化を再発見し、民俗文化財としての価値化を図り、調査レポートなどを取りまとめている。そして、最終的に冊子体として大学名で報告書を作成し、調査地の住民や市町村の教育委員会、地域の博物館や資料館に配布するという事例が増えている。

1つの事例として、2017年10月21日から22日にかけて別府大学において国際フォーラム「地域文化の再発見—大学・博物館の視点から」^{注3)}で紹介された別府大学と台湾国立台北芸術大学(以下、台北芸術大学)の報告を取り上げたい。

別府大学の報告では、大分県竹田市の祭礼調査の事例が紹介された。数多くの祭礼行事を継承する竹田市は、大分の祭礼文化を考えるうえで民俗学的に重要な地域と認識されているものの、過疎化が進むなか、慢性的な担い手不足に陥っている。そこで、別府大学では、竹田市の教育委員会と連携し、祭礼行事をテーマとした民俗調査をおこない、あらためて竹田市の民俗文化財としての価値化を図っている。一方、これらの祭礼行事では、調査の一環として学生が祭りに直接参加をして祭りそのものを活性化する作用を生み出した。さらに、調査に参加した学生が卒業後には祭礼行事の担い手として、より積極的に活動している事例が紹介された。本事例は、大学と地域が祭礼行事を通じて、大学は学問の場の獲得、地域は祭礼行事の活性化や人員の獲得といった、お互いにとって有益な関係性を築くことに成功している。大学、行政、地域が一体となったこのような活動は、これからの日本における新たな地域文化の継承モデルとして注目できると考える。

次に民博と共同調査をおこなっている台北芸術大学の報告を紹介する。台北芸術大学からは、古い街並みを活かして、地域づくりを試みている大溪(ターシェ)の活動が紹介された。台湾北西部に位置する大溪は、清朝時代より、水運を利用した貿易拠点として発展した街で、樟脳(しょうのう)やお茶を産出したことでも知られていた。しかし、時代を経て水運が利用できなくなると、その活力はじょじょに失われていき、昔の



台湾大溪における旧家を活用した町並み保存の現地調査(2016年11月26日、筆者撮影)。

街並みのみが残されている状態となり、過疎化の問題が深刻化していった。しかし、近年、住民が主体となって大溪に残された昔の素朴な雰囲気や漂う街並みを活かし、大溪の博物館を拠点とした地域活性の取り組みがなされるようになった。このような動向は、1960年代後半から提唱されたエコミュージアムの思想に近いものであり、博物館を拠点とした住民主導型の台湾における地域文化の再発見と活用事例として、今後もさらに注目していきたいと考えている。

地域文化を保存するための研究活動

本研究で対象とする民俗文化財にはいくつかの資料群が考えられるが、有形のモノとしては、民具をはじめとする地域で利用された生業の道具や生活用具をあげることができる。そこで本研究では、2つ目の研究活動の柱として、これらの資料群が、地域で守られ継承されるための保管方法の技術開発をおこなう。具体的には、専門の保存修復家でなくてもできる清掃による保管方法や、劣化を一気に促進させてしまう虫害などの生物被害を未然に防ぐための方法、あるいは収納と展示を両立することができる収蔵展示の技術開発に

取り組む。そして、これら民俗文化財の保管方法の技術開発の研究のフィールドとして、学校所在の民俗文化財を対象とする。

学校所在の民俗文化財は、1980年代に全国で民俗資料館の設置や市町村史の編纂が盛んにおこなわれた際に、収集されたものが中心となっている。その後、これら一連の活動は一段落し、年々、活用の機会が失われていった。また、少子化が進むなか、学校の空き教室にこれらの民俗文化財が仮保管される事例が増えて

いった。これらの民俗文化財は、小学校の「昔の暮らし」の授業で利用されることもあるが、用途などの学術的な情報が不足したままの活用となっていることが多い。そして、学校所在の民俗文化財の大半は死蔵されているのが現状である。一方、災害で被災した文化財の保全を目的とし、被災現場から文化財を取り出して、安全な環境で保管することを活動の柱とする文化財レスキューでは、学校所在の民俗資料のレスキュー要請が数多く出され、全体の作業の大部分を占めた。これは、日常的にはその存在すら意識されていないものの、災害などで消滅の危機に直面すると、かけがえない地域文化遺産として地域でとらえられることを物語っている。そこで、本研究は、民俗文化財を管理している学校と、学校との仲介役である地域博物館と連携し、学校所在の民俗文化財がより積極的に活用されるプログラムを策定し、教育資源としての価値化を図りたい。具体的な活動については、後述する教育パックの制作と運用実験の成果を活かしていくことを考えており、実現できれば、文化財分野でいう「保存」と「活用」のモデルについて、より踏み込んだ方法論の提示になろう。



宮城県気仙沼市でおこなった教育パックの研究会(2016年7月12日、和高智美撮影)。

「宝箱」に収納している民俗文化財を実際に展示している博物館や資料館を訪れて、地域文化をより理解できる運用を考えている。現在、「地域文化の宝箱」の対象としている地域と民俗文化財は、東日本大震災で被災し、文化財レスキューがなされた宮城県気仙沼市の「気仙沼資料」、奥三面ダムの開発で水没した三面村の民俗文化財が伝えられている新潟県村上市朝日の「奥三面の山村生産用具」、京都という大都市に隣接しながら豊かな里山文化を育んだ京都府京都市左京区久多の「久多の山村生産用具」、全国で唯一、江戸時代の鋳物

工場が残る大阪府枚方市の「旧田中家鋳物資料館所蔵資料」となっている。また、「地域文化の宝箱」は、ただ開発するだけではなく、実際に使用した学校と緊密な連携を取りながら、評価、分析し、改善するところまでを射程に入れている。

地域と協働した研究成果の発信

以上のように、本研究では、地域文化を「再発見」、「保存」、「活用」という視点から、実践的な研究活動を展開している。そして、これらの研究成果は、民博と協力機関である各地の地域博物館を核としながら、地域住民も参加する企画の実現を目指すこととし、実際の研究フィールドとなっている地域にも積極的に還元していきたいと考えている。

その方法として、2016年11月13日に岩手県大船渡市で実施した「文化遺産の継承と発展 郷土芸能復興支援メッセーみんなで語り、みんなで継なごう」というワークショップをモデルとしたいと考えている。本企画は、冒頭で紹介した民博における東日本大震災の被災地の郷土芸能の復興支援の活動をさらに発展させ、被災地に民博の研究者が赴き、被災した地域で郷土芸能の将来を考えるものであった。その目的は、郷土芸能団体が活動を継承し、未来に向けてさらに活動を活性化していくために、被災した郷土芸能団体のこれま

地域文化を活用するための研究活動

地域文化を内包する民俗文化財は、地域にとってかけがえのないものだといえる。このことを示す事例として、前述した東日本大震災でおこなわれた大規模な文化財等レスキュー事業で、被災地からレスキュー要請が出された文化財の約80%が民俗文化財であったということをおげることができる。しかし、これらの民俗文化財は、地域において日常的に積極的な活用がなされているとはいえない。そこで、本研究では、3つ目の研究の柱として地域文化を示す民俗文化財を日常的に活用できる仕組みをつくることで、「地域文化を活用する」という課題に取り組みたいと考えている。

民俗文化財の活用方法については、筆者が所属している民博で開発された教育キット「みんぱく」を参考にしたいと考えている^{注4)}。「みんぱく」とは、子どもたちが実際に着用できる民族衣装のほか、生活用具や学用品、楽器などをスーツケースにパックした貸出学習キットである。現在14種類23パックが用意され、関西を中心に多くの学校で利用されている。この「みんぱく」を参考に、「地域文化の宝箱」(仮称)として、地域で収集された民俗文化財を中心とした教育キットの製作を目指している。実際の活用は小学校の授業を中心に考えており、学校の教室で学んだ児童が、



岩手県大船渡市でおこなった郷土芸能復興支援メッセの会場の様子(2016年11月13日、西岡圭司撮影)。

での歩みと現在の課題を共有することであった。また、今後も発生する自然災害などによる存続の危機に対応するための、事前対策、支援のあり方、その支援を受けるためのノウハウの整理、平常時における衣装・道具類の維持、管理の仕方などを共有する機会とすることを目指した。この企画では、研究協力者である橋本裕之(追手門学院大学、当時)に被災地の芸能支援活動のあり方について助言を求めた。また、被災地の郷土芸能の現状を調査する調査委員である大船渡市在住の古水力、釜石市在住の笹山政幸には、被災地の教育委員会、郷土芸能団体との連絡調整の役割を依頼し、現地での体制を整えた。くわえて、外部機関からの協力として、芸能団体への活動資金をはじめとする助成情報について、地元の陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町、山田町の教育委員会、全日本郷土芸能協会や東京文化財研究所、ふるさと岩手の芸能とくらし研究会「とりら」をはじめ、多くの機関の協力を得ることができた。また、道具類に関する情報として、宮本卯之助商店、新川靴・太鼓店、京屋染物店、伊藤染工場の協力を得ることができた。このように地域文化を支える存在として、地域住民とともに、研究者のみならず官民の団体が一同に集うことで、地域文化である郷土芸能の今と将来を考える機会となった本企画を参考に、現在のプロジェクトにおいても地域と協同した研

究成果発信を1つの方法として導入したい。

最後に本研究の到達点についてその展望を述べておきたい。本研究では、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって有意義な形で理解しあうためのシステムを構築することを目的としている。そして、ここでおこなう研究からは、①地域の文化を「再発見」し、「保存」、「活用」するという実践研究を通じた人間文化研究の新たなモデルの構築、②地域住民が博物館を活用しながら地域文化の大切さ

を感じとることができる教育プログラムの策定、③研究成果を地域において活用していくための、地域と研究者の結節点の創出、④豊かな地域社会を創生するうえで、地域文化の果たす役割の提示、といった4つの到達目標を設定している。本研究では、これらの到達目標を達成すべく、本稿で紹介したような研究活動を推進していきたいと考えている。

注

- 1) 特集「復興への道3」『季刊民族学』148号(千里文化財団 pp. 3-84 2014年)、特集「復興への道4」『季刊民族学』152号(千里文化財団 pp. 57-92 2015年)、特集「復興への道5」『季刊民族学』156号(千里文化財団 pp. 82-103 2016年)、特集「復興への道6」『季刊民族学』160号(千里文化財団 pp. 79-94 2017年)
- 2) 「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究—大学共同利用機関の視点から」
<http://pj.ninjal.ac.jp/shinsai/b1/> 2018年1月9日アクセス
- 3) 国際フォーラム「地域文化の再発見—大学・博物館の視点から」
<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20171021>
2018年1月9日アクセス
- 4) 「みんぱく」
<http://www.minpaku.ac.jp/research/sc/teacher/minpack/index>
2018年1月9日アクセス

ひだか しんご

国立民族学博物館人類基礎部門研究部准教授。博士(文学)。民俗文化財の保存修復方法、博物館における資料保存に関する研究をおこなう。主な著書や編著書に、「女乗物—その発生経緯と装飾性」(東海大学出版会 2008年)、『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』(千里文化財団 2012年)、『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』(千里文化財団 2015年)がある。